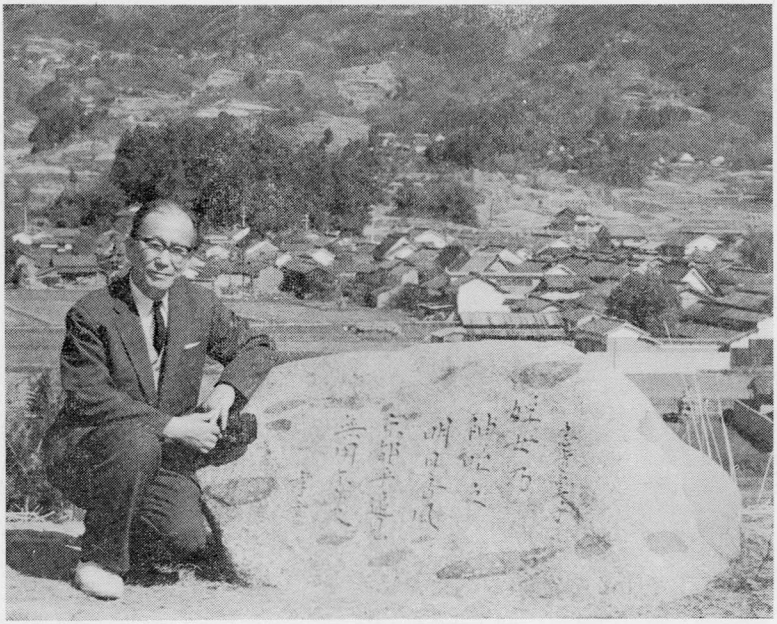
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	犬養孝教授の退官に際して
Author(s)	林, 和比古
Citation	語文. 1971, 29, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68588
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka



犬養孝博士と自筆万葉歌碑

犬養孝教授の退官に際して

林　和比古

昔々、今から四十年もの昔、東大「山上御殿」といわれた所で国文学科新入生歓迎会があった。五高から来た長髪長身、黒びかりの顔の男、それが犬養君の初印象であった。森本治吉さんの紹介の辞で「万葉地理をやる」という。入学当初からこんな具体的な目標をもっている奇特さに私たちは驚いた。そして森本さんのことば通りを恐ろしい情熱で貫き通してきた男、万葉といえば、ほかはみんな忘れてしまう男、それが犬養君なのである。

卒業は昭和七年三月、今日ではちょっと想像できまいが、繩文以来？の不景気の中へわれわれはほおり出された。犬養君は横浜一中に就職し、まもなく「海の見える丘に住んでいる」という、君らしいたよりを貰った。おそらくその頃、夫人と結ばれたのであろうが、私は山の方に住んでいて、いきさつを詳かにしない。

それからの十数年はお互い暗中模索の時代であった。研究に、職務に、その上戦争の外圧がひしひしと加わってくる。赤紙と赤だすきが街を交錯する。この間にも君の論文は数多く記録されていった。私はといえば、続々と子供を生産して、それを養うのに苦しむという自繩自縛に陥っていた。

犬養君は戦時中、台湾高校教授となり、そこで現地召集を受けたそうだ。――戦争は終った。晴れ初めた砲煙のすき間から帰還者の顔がぽつぽつ見え始めた。彼は台湾から引き上げて来て大阪高等学校に迎えられたのであった。同じ年私も大高に来た。二人は十五年ぶりの再会を堅い握手で祝福し合った。聞けば書物や持ち物は全部とり上げられ、長い棧橋を病気の夫人を脊負って帰還船に乗込んだという。再帰後の活動がそれから始まったのである。（これらの活動については世間周知のことでもあり、私も前に纏めておいたものがあるのでそれに譲ることにする）

「人の短をあぐる勿れ。己れの長に誇る勿れ」という教えがあるが、およそ、これの最高の該当者は彼であろう。長年

のつき合い中、彼が人をそしったのを聞いた事がない。私など大声で人の悪口をいうが、彼はちっともおこらない。人がきいて不快の種になりそうな事はいっさい口にしないのだ。万葉の恋愛歌は精細に分析するが、現代人の心には無関心かと思うとそうではない。ちゃんと分っているのだ。しかし心の不快は、それを腹でじっとこらえ、百倍のエネルギーに再生し、仕事として表わしてくる。それが犬養君の騎士道だ。やはり彼は雲の上人、貴種の流れであるらしい。

一方、人にはよく勤める。師に、教え子に、友人に。どのような他に対しても、いんぎん礼を厚くして応える。紳士といったのでは足りない、やはり騎士である。夫人が病気の時、それは長い期間にわたったが、その温い心遣いは、とても常人のまねのできるものではなかった。阪大吉田内科の方々の手篤い長期の加療で、さしもの難病から夫人が奇跡的に全快された。これは結局犬養君の人柄がそういう結果をもたらしたものと思う。愛情といったら甘い、むしろ至誠というべきであろう。学生に接するのもこれである。彼等が随喜賛仰するのもうべなりである。

読者は私の文章をよまれて相当うんざりするかもしれぬ。全然知らぬ人がよんだら、楽屋ぼめだと思うかもしれぬ。由来、人をほめるのも、人がほめられているのを聞くのも、そんなにおもしろいものではない。私も何か悪口の種が無いかと頭をひねるのだが、ちっとも見つからないからふしぎだ。しかし彼を知る人はみな同じ感じをもつにちがいない。

これが犬養君の特徴であり、人柄だと思う。

君は老来いよいよ元気である。飛鳥保存でも随分働いた。タイミングもよかったが、君の熱心がなければ政府もあんなに早くついて来なかったかもしれない。人徳のいたす所というほかはない。益々自愛、世のため、人のため活躍されんことをお願いしたい。

長年にわたっての君の活動舞台であった阪大を定年退職されたに際し、語文編集者から求められるままに、君に対する感謝と祝福の辞を草した次第である。